

Web Column③ リーダーをめぐるデータセット (初版の Column⑥)

政治学では、さまざまなデータセットが整備されている。中でも選挙データや国力データ（軍事歳出や国内総生産〈GDP〉など）はよく知られている。加えて、戦争や同盟といった計測がなかなか難しいデータも蓄積されてきた（第10章参照）。

そんな中、「リーダー」のデータセットも整備されつつある。ハインズ、グレディッシュ、チオッサによる Archigos は、1875年から2004年までの188の国のリーダーの情報を集めた大規模なデータセットである（<http://www.rochester.edu/college/faculty/hgoemans/data.htm>）。

リーダーの登場（entry）がその国のルールに基づいたものである「通常（regular）」の場合は、2433件あり、データセットの80.43%を占める。他方、クーデターといった「非通常（irregular）」の方法でリーダーが就任するのが549件（18.15%）あり、「外国が占領などを通じて強要した場合（foreign imposition）」が41件（1.36%）あったという。なお、残り2件は確定できなかった事案になる。

これに対して、リーダーがその職を追われる場合については、その国のルールに基づいた「通常」の退陣の場合が1955件（64.63%）で、「自然原因での在任中死亡（death by natural causes）」が184件（6.08%）、「病気による退陣（retired due to ill health）」が60件（1.98%）、「自殺（suicide）」が5件（0.17%）、「クーデターといった「非通常」の退陣が577件（19.07%）で、最後に、外国による強制による退陣（deposed by another state）が72件（2.38%）であった。

興味深いのは、退陣のタイプによって、その後のリーダーの人生が大きく異なってくる点である。「通常」の退陣であれば、離職後1年後にも問題なく生存している割合が93%であるのに、「非通常」の退陣になるとその割合が19%まで激減し、国外への亡命が43%、収監が18%、死亡が20%にのぼる。このデータは、本章のテーマであるアカウンタビリティとレスポンシビリティの観点から1つの解釈が可能であろう。つまり、独裁政治のようにアカウンタビリティのない政治体制では、「非通常」の退陣が多く、それは最終的にはリーダーにとって、亡命、収監、死亡という結末の可能性を見通させる。したがって、当該リーダーが自ら積極的に辞めるという選択は期待できないことになる。いわば、失政の責任をとっての辞職というレスポンシビリティも果たせない結果、体制は泥沼にはまっていく。北朝鮮のような国家体制がなぜ続いていくのかは、このような見方で理解できるのかもしれない。